

一級河川安威川の治水目標と治水手法について

<補足資料>

平成 22 年 7 月 10 日 (土)

大阪府都市整備部河川室

目 次

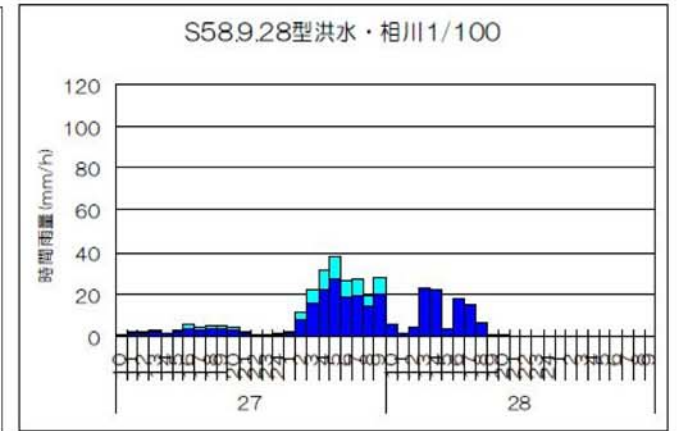
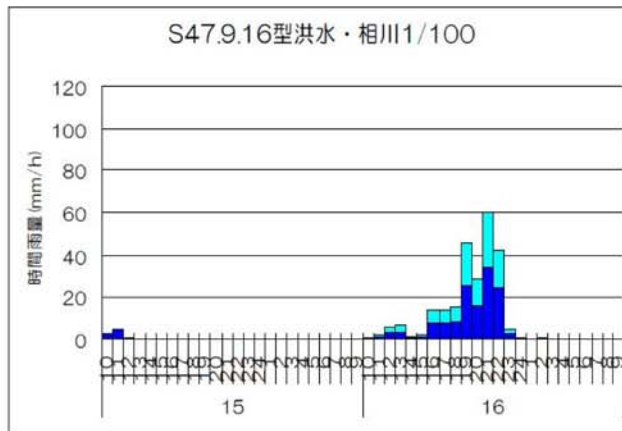
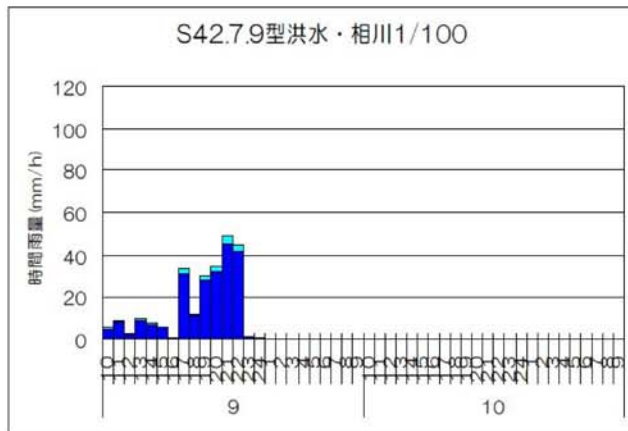
1. 被害特性の感度分析 -----	1
■ 降雨波形の違いによる被害特性の感度分析 -----	1
■ 破堤条件の違いによる被害特性の感度分析 -----	3
2. 河道改修案で連続堤方式を採用している根拠 -----	4

1.被害特性の感度分析

■降雨波形の違いによる被害特性の感度分析

感度分析に使用する降雨波形は、昭和42年7月9日型降雨、昭和47年9月16日型降雨、昭和58年9月28日型降雨とする。

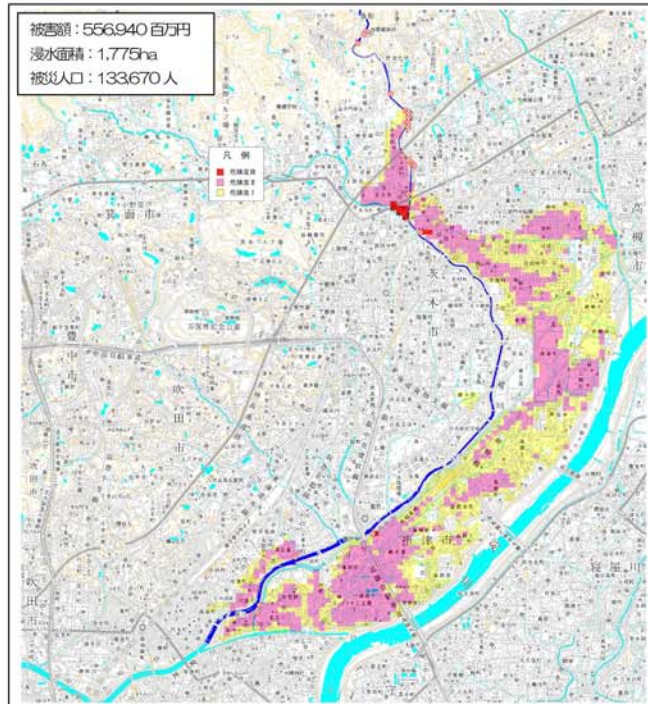
○降雨波形



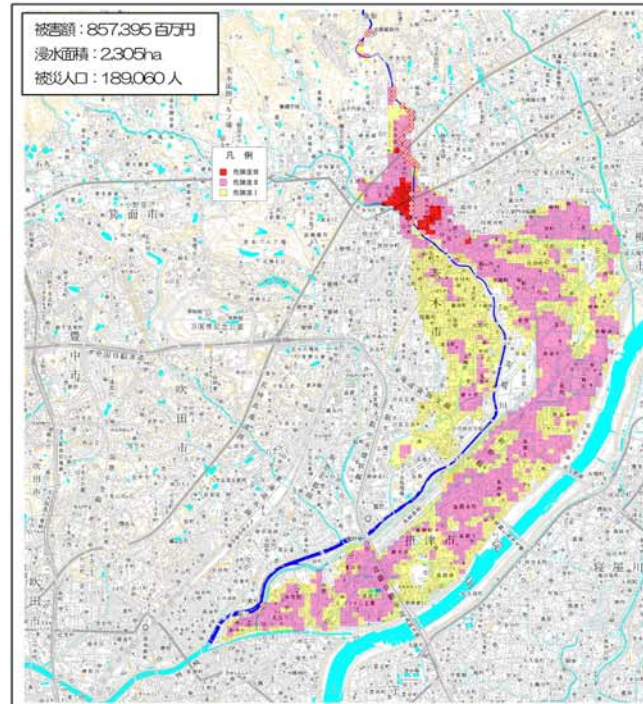
■ 実績降雨
■ 計画降雨

<現況河道で80ミシ程度の降雨が発生した場合を想定した氾濫解析結果>

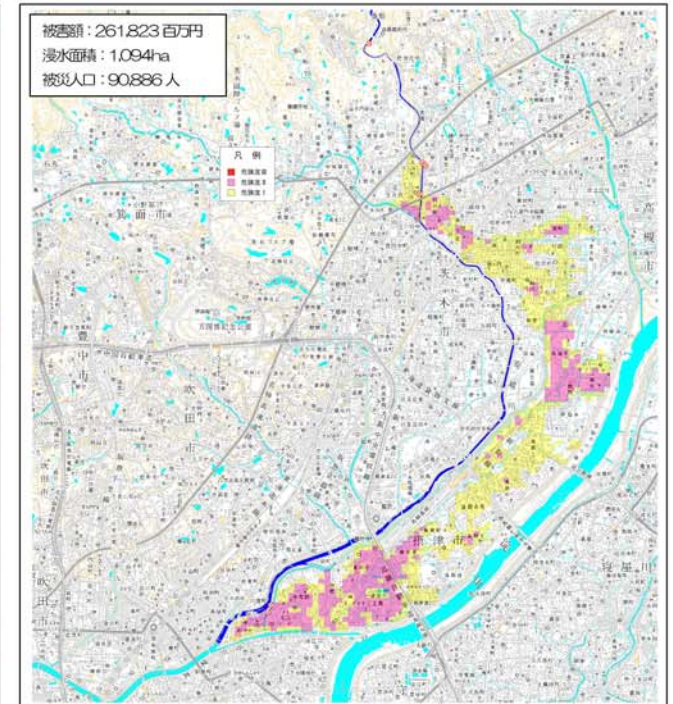
<S42.7.9型>



<S47.9.16型>



<S58.9.28型>



どのケースも危険度Ⅱ、Ⅲが発生

凡例

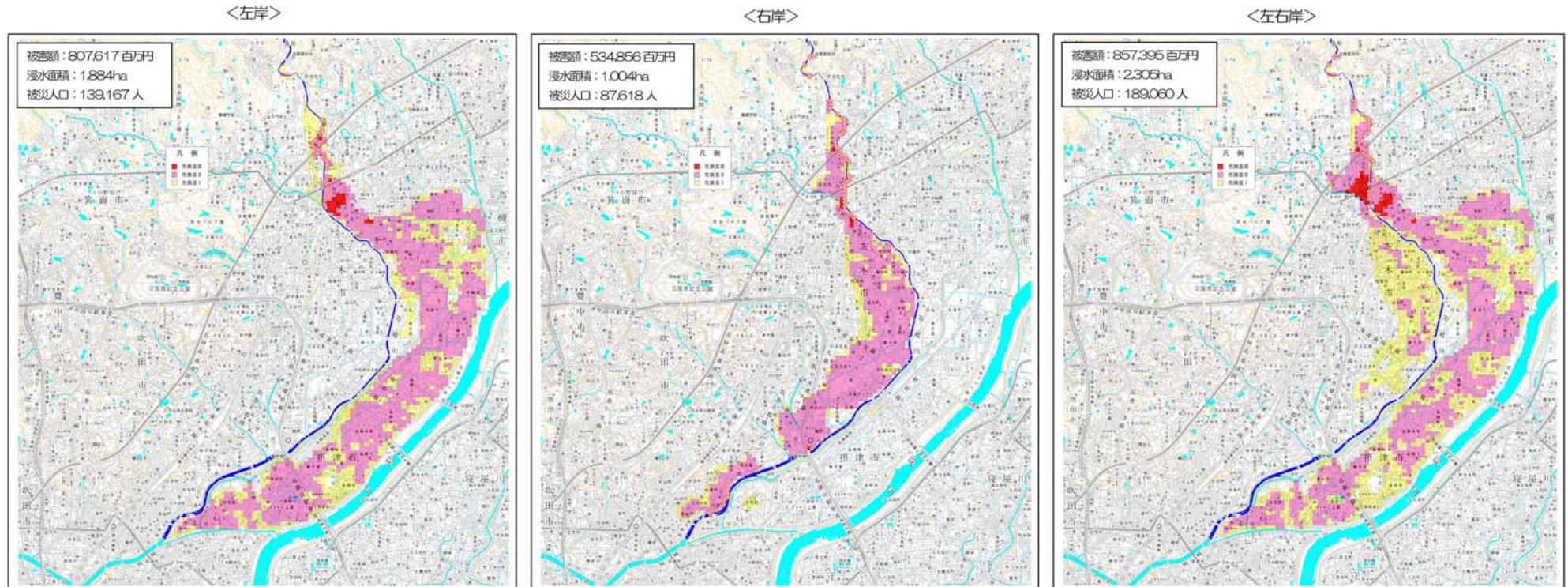
- 危険度Ⅲ
- 危険度Ⅱ
- 危険度Ⅰ
- ⊗ 破堤地点

■破堤条件の違いによる被害特性の感度分析

降雨波形や河道の状況などの、破堤条件以外の条件は同じにして氾濫解析を行い、破堤条件による被害特性の感度分析を行う。

破堤条件は、①破堤地点を左岸のみとするケース、②破堤地点を右岸のみとするケース、③破堤地点を左右岸のいずれか破堤数高の低いほうとするケースの、合計3ケースとする。

<現況河道で80ミシ程度の降雨が発生した場合を想定した氾濫解析結果>



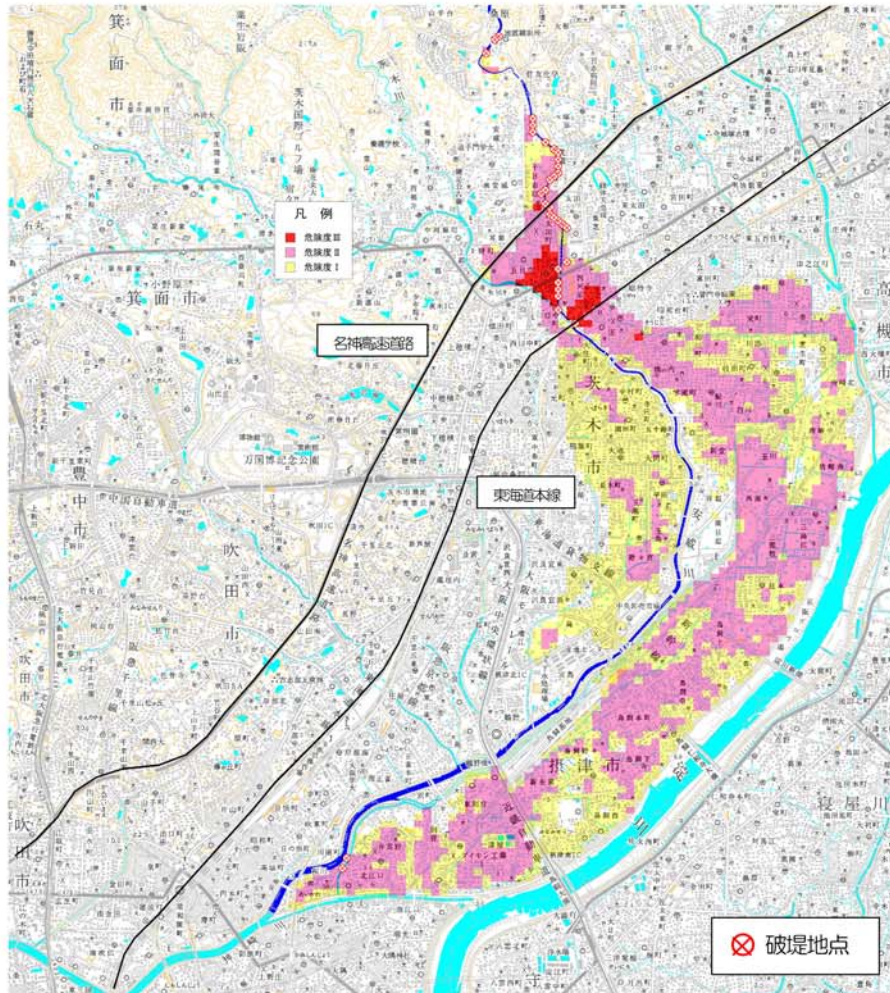
どのケースも危険度Ⅱ、Ⅲが発生



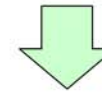
2.河道改修案で連続堤方式を採用している根拠

現況河道を対象として氾濫解析を行った場合、破堤地点は上流に多く存在する。もし上流部のみ部分改修を行って氾濫がなくなれば、河道改修費は大幅に抑えられる。部分改修で氾濫がなくなるかどうか検証する。

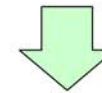
<現況河道で80ミリの降雨が発生した場合>



現況河道で氾濫解析を実施



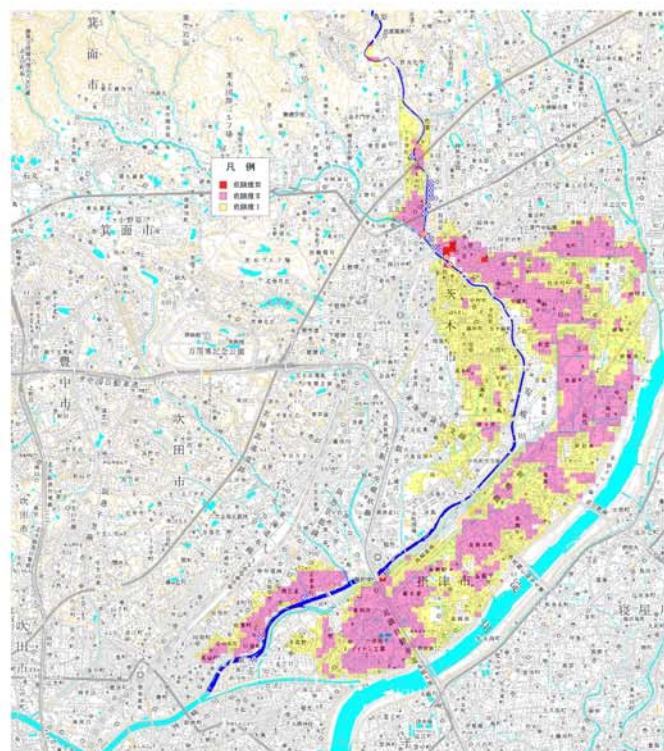
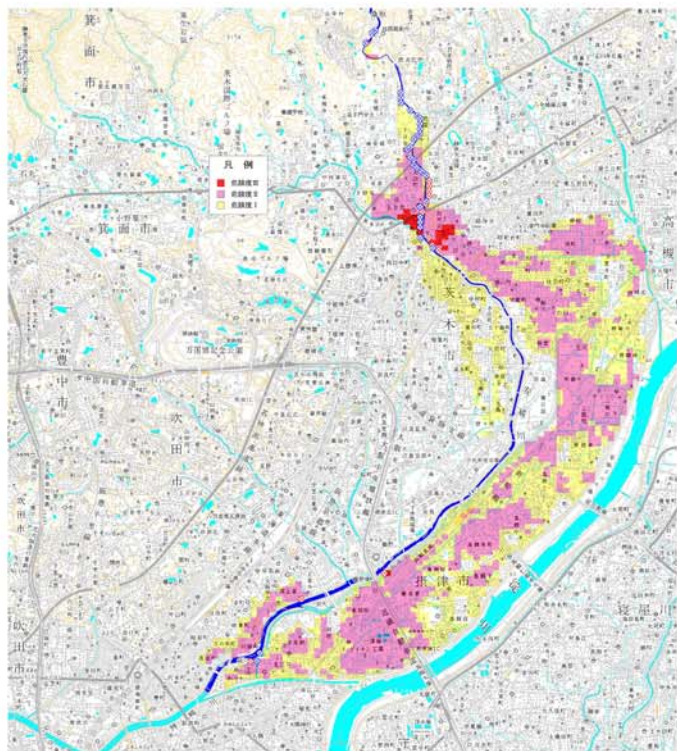
現況で破堤している箇所を部分改修した場合を想定して氾濫解析を実施（1回目）



現況で破堤している箇所を部分改修した場合を想定して氾濫解析を実施（2回目）

<破堤地点を部分改修した後に80ミ程度の雨が降った場合（1回目）>

<さらに破堤地点を部分改修した後に80ミ程度の雨が降った場合（2回目）>



- ⊗ 改修前破堤地点
- ⊗ 改修後破堤地点



部分改修をした箇所は破堤しなくなるが、その他の箇所が破堤しており、結果的には被害の出ている場所が移動もしくは被害の程度が変わるだけとなる



安威川のような築堤河川では、部分改修により破堤地点が変わっていただけであり、最終的に連続堤方式となる

